

れる作業が始まった。
元来なら、集計作業までは新労働本部の事務で、それから先が給与専門委員の仕事であろう。だが、人手不足の本部ではどう仕度もない。また、それを知らずに専ら委員が集計作業まで引受けてくれたのであろう。

考えれば、組合の仕事はこのように助け合うところに意義があり、団結力が生れてくるのではなかろうか。しかも、給与専門委員は地味で根気の要る仕事で、積重ねてあり、全く「縁の下」の力持ちである。

しかし、この「縁の下」の力が組合運動の原動力であり、明日の生活の向上につながるものであることを思えば、助け合いの気持ちでなされる地味な仕事は、日赤新労働にとつて如何に重要であるか、改めて言うまでもなからう。

夜の九時、第一日の予定作業をやつと了った。

殆んど坐り通しの作業に、誰の顔にもぐつたりした表情が現われている。

一方、あれほど高かつた調査票はぐんと減つて、この分では明日の午前中で集計作業は終りそうである。



数字と取組む給与専門委員
本社宿泊部にて

十七日(日)、第二日。
少し慣れたのか、昨日と違つて集計要領やパチパチ云々算盤の音が早くなった。

ミスの発見の仕事も早く、疑問の点は全員で検討し合いながら作業は着々と進められている。

昨午、今日も執行委員長が姿を現わした。片手にカメラをぶら下げていた。

「スペースをひねり出して、給与専門委員の初仕事ぶりを機関紙に載せたいから——」

そう云いながらカメラを構え、無造作に二、三枚撮る。

執行委員長として今年の運動方針である「年金制度の確立」が進展していかないのを気にしてか、熱を帯びた口調で話し始め、この専門部会で年金制度の大綱を示すよう努力してほしいと何度も云う。

団交や中央委員会資料の再検討のため新労働本部に執行委員長の向つた後、遅い夕食を済ませて作業の総仕上げだ。

この調査票にもとずいた完全な資料を作るには、凡そ一月かかるといふのである。一回や二回の専門部会で作れるものではない。

委員もそのことは百も承知してはいる。だが、一回毎に一応の結果

は出る筈だし、それを出そうというわけである。

集計用紙の検討が始まつて、現在までの作業の整理、統一がなされ、委員相互の討議に移つた。順次討議を重ねるにつれて、給与の矛盾、格差が大きくなつて、給与と年齢、村岸専門委員長の手によつて末尾のように給与実態調査票の第一回集計報告が最終的にまとめられた。

今後回を重ねて完全な基礎資料にしようというコトバで給与関係の仕事は打ち切り、少憩の後「年金制度の大綱」に関する討議に移つた。

これも給与に負けず劣らず重要な仕事である。また、日赤新労働して運動方針に掲げられているものもある。

委員相互に意見、資料を出し合つて検討し、夕食もそこそこにして、夜の更けるまで凡ゆる角度から討議が加えられ、練り上げを明日に持越そうという結論の出たのが午前零時近頃であつた。

翌十八日(月)、給与専門部会最終日である。

昨日に引続いて、日赤新労働としての年金制度案の討議を再開し、各委員の意見の調整に入った。

午前十一時、漸く大綱をまとめあげて、給与及び年金に関する第一回の給与専門部会々合を終了した。

三日間に亘つて本社宿泊部に詰詰となり、給与専門部会委員として、地味な仕事を終始熱心に忍耐強く果された村岸氏以下五名の方に、小崎執行委員長が心から感謝されてきたことを付け加えて、この報告も終了した。

報告
給与専門部会

(一) 給与実態調査票の回収率が約七〇%であつたことは甚だ遺憾であり、提出された単組に対する信義上からは云々までもなく統計上からも正確に期し得ない。この結果が賃金一般に對する日赤新労働の運動方針決定の資料ともなることを銘記されて、未提出の単組は早急に提出されることを望む。

(二) 調査票記入については、基準内賃金及び基準外賃金の不明のものがあり、暫定手当等は追加記入した。また、俸給を明らかに誤記しているものもあつた。

調査票の第一回集計結果については後日発表するが、(一)及び(二)より、平均値に多少誤差を生ずることは予め承された。

退職年金制度については、労働使双方の積立てによつて年金源資をつくる拠出制とし、当面は有期年金(五年、十年、十五年二十年等)で進み将来は終身年金に移行する。また、退職一時金との関連は、それを必要とする現状でもあるので当面は退職一時金及び年金の併給制とし、将来は年金制度一本とするのが望ましい。

以上

横から眺めて
北海道生

不肖私こと曲りなりにも組織の末端にたつた一員であり、このごろになつて先輩各位のご指導のおかげで、幾分か労働組合というものが分る理由の一端が分る気がしています。

労働者というものは、一人一人の力では到底経営者に太刀打ちできないといふことも漸く分かつて来ましたが、その末席を汚したに過ぎない私が、この欺文を草すに到りましたのは、生意気なようです。初志には初心者としてのもの考へ方があるのではなかつたかと思つたからに他ありません。ですから、私の投稿するこの一文を、光栄ある「日赤新労働ニュース」に掲載するように強要する気持など更々ありません。その点お含みの上、取捨ご自由にお願ひします。

不肖私日本の北の果て北海道の日赤医療施設の一組合員であります。組合員となりまして漸く一年が過ぎようとして、私の平組合員に過ぎません。

その一年余の間に、私が一番深く考えさせられたことは、それは私たちの職場に二つの組合があるという事実でありました。同じ職場にあつて苦勞を分かち合ひ楽しみを共にする同僚たちが「おれはこつち、君はあつち」と別れていることは、どう考へても不平等であり残念であると思われないです。

一つの力を二つに割ることはマイナスになつても、決して労働のプラスにはなりそうにありません。

一つに結果すれば一つの力を發揮できるものが、二つに割れて出せないという事態が惹起されたとしたらどうでしょう。それこそ不幸なことではないか。それこそむしろ悲しむべき事態と言ふのではないでしようか。うしろの方ではくそ笑むのは誰でしょう。経営者です。しがたない平組合員の私は、このことが常々胸につかえていて仕方がないのです。

君にはまだ分らないので、二つの組織にはそれ相応の存在理由があるんだ。もつと苦勞してからモノを言ふことだ。

ある先輩は、私の質問に対してこう答へました。しかし、私は信じていません。右、左、と目に角を立ててみたところで、組合運動の終局的目的は、働かざる者の生活の安定——これです。取捨出してはあつても、私も一労働者として組織にたつた以上、かくあるべきであると思つておられます。

不肖私、研究不足の故か、左翼か右翼か、自己を判然と格つてから心でできないと思はれる道を踏み外さないように、じみではあつても着実な歩みを歩み続けて行く所存であります。このような考へ方を持つてはいる私の志向するところ、それは日赤新労働の進行方向と軌を一にするものであると懣懣ながら信じています。

不肖私、わが医療施設の労働組合が、労働者の幸福の前に互に従来ゆかゆかかかると踏み越えて何時の日にか一丸となつて、民主的日赤新労働の旗の下に結集するであろうことを期待し、念願しているものです。

くだいようですが、私は事業の発展と同時に、そこに働く勤勞者の生活の向上を望んでいます。連絡、通達、速報、ニュースと絶えず活動して下さる新労働の努力もまたここにこそあるものと理解し、同僚たちに対して、機をあげていような次第です。

ほつぽつと同調者が現われることとが「駆けだし者」を限りなく力をつけて呉れます。やがては、時が解決してくるであらうでしょう。身のほど知らぬ不埒の言葉を弄しました。ご寛容下さい。

未筆ながら、全国の日赤傘下の同僚各位のご健勝を、はるかに北の果てから祈つておきます。

このごろ読んだものから (3)
…… 乱読青年 ……

主人が居なくなつたので、笹井は主人の妻と談合の上印刷屋を売却し、妻君はその金を持つて実家へ引き上げることとなつて来た。半年か一年経過してはとほりがさめたら妻君を東京に呼び寄せて結婚するという約束であつた。ところが、親戚の縁者や友人と実家にいる間に親戚縁者や友人と云つた連中から金ばかり取られてつて上京して来る。笹井は金の無くなつた女などに用はないのだ。

日赤の経理は乱脈の限り? 事件の真相と幹部の責任を徹底的に追求!!

今月に入つて、静岡県支部の会計課長が「子供の高校入学失敗を苦にして」自殺したという事件があつた。日赤新労働本部では、某組合員を通じて申意を表明しておくと共に、いささかフに落ちぬ点があつたのでそれとなく調査したところ、自殺の原因は「会計の乱脈」であるという情報を掴んだ。

かねてから、日赤の経理に疑問を持ち、幹部と出入業者とのナレアイは公然であるといふ噂も聞いていたので、この情報を掴むや、新労働本部一同の憤激は一挙に爆発し、「コトの真相を明らかにし、本社幹部は云々までもなく、関連した幹部の責任を徹底的に追求する。また、若し組合員の中に片棒を担いだ者が居るならば、断乎として除名の処置を講ずる」と、日赤新労働本部の態度を決定した。協力を望む。

日赤新労働本部

先月号からの行きがかりで、今これを出して誘つて殺害する。次々と殺人を実行する間に白痴の子供とか元南栄堂の職長とか、笹井が東京で雇つてた女事務員とかいふような人間が絡んでいて複雑怪奇の事件が展開して行く。

九百枚にわたるこの長編は、数多い松本作品の中でも、遠慮方のかみらみて読みごたえのあるものである。(講談社・三二〇円)

▼華やかな死体——佐賀藩。第八回江戸川乱歩賞に選ばれた作品である。はじめこの作品は「検事」という題で書かれたものであるという。題で書かれたものであると下手人を追つて、検事と弁護士の虚々実々の論議を展開する。最後に津田という巡査部長が「裁判なんて何を裁くのだ。裁判不信だ」と叫ぶところまで、この四百五十枚の小説は終つてゐる。さきさきろ映画になつた「黒の報告書」の原作であるが、映画では最後の絶叫が省略されている。裁判というものを新しく見直す意味からもこの作品は裨益する多くのものを含んでいようである。因みに作者は検事生活二十余年の後、現在では弁護士を開業している。(講談社・三〇〇円)

▼大いなる幻影——戸川昌子。この小説も華やかな死体と同時八回乱歩賞の受賞作。作者は二十歳のシヤンソン歌手という変り種である。大塚の女子アパルトに住んでいる女たちの奇妙な生活が克明に描かれて、それが最後のところまで犯罪に結びついていっているという構成であるが、読んでいると少々が混乱しそうだ。文章はなかなか重厚なものである。選者諸氏は「奇妙な味」の心理的推理小説であると云つていて、たしかに奇妙な味の作品にちがいない。(講談社・二八〇円)

次に歴史物に触れよう。

▼鯨魚縦巻——三田村鳶魚。この本は、入手困難かも知れないが、参考までに。南蛮又九郎、堀きの話、江戸一番の下女、内藤新宿、当夜の小林平八郎、幕府の瓦解と男女の道、紛失した酒落といふ話が分りやすく記述されていく興味深い。江戸研究家には得がたい著作。(昭和十七年桜井書店・三十五十銭)

▼日本武芸小伝——細谷真。標題のとおり武芸者の系譜と伝記である。海音寺潮五郎氏が「日本ははじめて頼りになる武術史の本を持つことができた」と云つてゐる。本朝武芸小伝、新撰武術流祖録、武術流祖録後編流名、善行録、ありやなしや、以上五編の口語訳で、誤謬、矛盾の指摘、関連資料にもとづく補記等を加えた四六判五百頁に近い大冊である。考証にかけては名のある著者のものだけに信頼するに足るものであることには云々でもない。時代物を読むにも、また書かないとする人にも座右に備えて教えられるところが多いであろう。(人物往来社・四九〇円)

▼吉原に就ての話——三田村鳶魚。著者は故人であるが、江戸研究の第一人者江戸に關しての数多い著書がある。稲垣史生著「江戸武家事典」(青蛙房・九〇〇円)は、鳶魚氏の著書の研究から生まれたものである。

▼吉原の話、初めての私娼窟、奴遊女九重、高級の遊女、大通と良辰の情事、吉原一夕話といううな目録で、吉原について実に丹念に調べてある。江戸のことを知るには好例の読物としても楽しめるものだ。(青蛙房・三八〇円)

日赤新労働本部

標題のとおり武芸者の系譜と伝記である。海音寺潮五郎氏が「日本ははじめて頼りになる武術史の本を持つことができた」と云つてゐる。本朝武芸小伝、新撰武術流祖録、武術流祖録後編流名、善行録、ありやなしや、以上五編の口語訳で、誤謬、矛盾の指摘、関連資料にもとづく補記等を加えた四六判五百頁に近い大冊である。考証にかけては名のある著者のものだけに信頼するに足るものであることには云々でもない。時代物を読むにも、また書かないとする人にも座右に備えて教えられるところが多いであろう。(人物往来社・四九〇円)